

小学校社会科におけるパフォーマンス評価に基づく単元設計

—小学校5学年「米づくりのさかなな地域」における学習課題の設定を事例として—
森田幸一郎（みよし市立三吉小学校／名古屋市立大学大学院人間文化研究科）

Unit design based on performance assessment of social studies in elementary school
-In the 5th grade of elementary school "A region where rice is cultivated"-

Koichiro MORITA

1 はじめに

社会科が、「暗記教科」という批判は古くからあり、その克服を図る実践や研究が多くなされてきた⁽¹⁾。ただ、社会科の授業で身につけておかなければならない知識の習得や社会生活をおくるうえで最低限必要となる知識は、その内容の吟味・検討は必要であるが、しっかり身につけなければならないであろう⁽²⁾。2003年のいわゆる「PISA ショック」で日本の「ゆとり教育」を見直す動きが出たことは当時話題となった⁽³⁾。やはり基礎・基本の知識の習得は、社会科に限らず、どのような教科でも必要なことだと考える。

また、求められる資質・能力にも変化が出てきた。各国の動向として、OECD や EU を中心とする「キー・コンピテンシー」（ライチェン&サルガニク、2006）を定義する流れと、アメリカにおける「21世紀型スキル」の用語を用いる流れがある⁽⁴⁾。各地で提唱されている「資質・能力」目標の構成要素が、およそ「基礎的リテラシー」、「認知スキル」、「社会スキル」の3つに分けられており⁽⁵⁾、その資質・能力をいかに習得するのかということが重要となってきた。

これらの流れを受けて、国立教育政策研究所は、「21世紀を生き抜く力をもった市民」としての日本人に求められる能力を「21世紀型能力」とし、その能力の詳細を「基礎力」（言語スキル、数量スキル、情報スキル）、「思考力」（問題解決・発見力・想像力、論理的、批判的思考力、メタ認知・適応的学習力）、「実践力」（自律的活動力、人間関係形成力、社会参画力など）から構成されるものと定義している⁽⁶⁾。



〔図1〕

現行の学習指導要領では、これまで「生きる力」として説明してきた学校教育の究極目標を「生きて働く“知識・技能の習得”」、「未知の状況にも対応できる“思考力・判断力・表現力等”」、「学びを人生や社会に活かそうとする“学びに向かう力・人間性等”」の3つの資質・能力に整理しなおした⁽⁷⁾。そこで、社会科において、「基礎・基本的な知識・技能の習得とこれらを活用する思考力・判断力・表現力等」を「相互に伸ばしていく」ための学力をどのように教育目標として明確にし、評価可能なものにしていくのかという課題が出てきた⁽⁸⁾。そこで注目されているのが、「パフォーマンス評価」の考え方である。

2. パフォーマンス評価について

学習評価については、一般的に想定されがちなのは、筆記テストや実技テストである。○か×かで採点できるタイプのペーパーテストは、限られた時間の中で多くの人数を対象として、幅広い知識が習得されているかを評価するには適している。しかし、習得した知識・技能を活用した「思考力・判断力・表現力」といった学力を評価するには、このような○×式のペーパーテストでは困難が生じる⁽⁹⁾。

その「知識・技能の活用」という点に関して、学力評価の分野で実践されつつあるのが、「パフォーマンス評価」である。パフォーマンス評価は、これまでは音楽や体育などの実

技教科で実践されてきたが、近年では「理解する」ことを目標の中心としてきた教科の学力評価においても積極的に取り入れられている⁽¹⁰⁾。パフォーマンス評価は、実際に生活や社会で直面するような文脈に即して問題場面（パフォーマンス課題）を設定して、その思考過程を評価するものである。

平成 28（2016）年 12 月の中央教育審議会答申（以下「中教審」）においても、「資質・能力のバランスのとれた学習評価を行っていくためには、指導と評価の一体化を図る中で、論述やレポートの作成、発表、グループでの話し合い、作品の制作等といった多様な活動に取り組ませるパフォーマンス評価などを取り入れ、ペーパーテストの結果にとどまらない、多面的・多角的な評価を行っていくことが必要である。」⁽¹¹⁾としている。

しかし、このパフォーマンス評価の実践は、管見の限り、中学校・高等学校では多く見られるが、小学校での実践例は少ない⁽¹²⁾。特に「米づくりのさかんな地域」の單元において、パフォーマンス評価に基づく実践は、私が探した限りでは見当たらなかった⁽¹³⁾。

そこで、本稿では、小学校社会科においてパフォーマンス評価を導入するにあたり、その理論に基づいて、小学校第 5 学年の「米づくりのさかんな地域」の学習に焦点をあて、單元構想について提案するものである。

3 單元について

小学校の段階では、「楽しいから勉強する」、「おもしろいから勉強する」などの『内発的動機づけ』、また「生活に役に立つ」、「役に立つ人になりたい」などの「同一的動機づけ」、いわゆる自律的動機づけが高いとされている⁽¹⁴⁾。そこで、児童たちが「もっと知りたい」、「課題を解決したい」といった「内的動機づけ」がなされるような問題解決学習的な單元構想が必要となる。その單元構想の中で、重要な視点が「単元を貫く問い」である。この「単元を貫く問い」は、単元全体を通して解決されるべき「問い」であり、児童全員が共通してもつ問題意識である。この「問い」には、児童たちが「調べたい」、「知りたい」と思うような仕掛けが必要である。そして、この「単元を貫く問い」は、パフォーマンス評価でいうところのパフォーマンス課題となる。

このパフォーマンス課題については、「知識が実生活で活かされている場面や、その領域の専門家が知を探求する過程を追体験する場面を設定する」⁽¹⁵⁾としている。また、パフォーマンス課題を作成するにあたっては、西岡は「逆向き設計」論を提唱し、原理や一般化についての「永続的理解」という重点目標に対応させ、「本質的な問い」を立てることとしている⁽¹⁶⁾。

その「本質的な問い」を立てる視点として、小学校社会科における社会的事象の見方・考え方「位置や空間的な広がり視点」、「時期や時間の経過の視点」、「事象や人々の相互関係の視点」の 3 つの視点があげられる⁽¹⁷⁾。この社会的事象の見方・考え方をを用いて社会的事象の見方・考え方の特色や意味などを考える力、社会的事象の見方・考え方をを用いて社会に見られる課題の解決に向けて選択・判断する力であると規定し、「見方・考え方」

《評価のきじゅん》

評価	知識・技能	表現・考え など	主体的に学習に取り組む態度
A	①気候や地形などの自然環境から米作りを考え た。 ②昔と今をくらべながら、米作りについて考 えた。 ③米作りにかかわる人た ちがどのように協力し ているかを考えた。	①学習したことを、他の 人に伝わるように、わ かりやすく、ていねい にまとめた。 ②学習したことから、必 要なことを選び、まと めることができた。 ③学習したことから自分 の考えをまとめた。	①相手の話をよく聞いて、相手の意見を尊重しながら、話し合いをしていた。 ②相手の意見を聞き、自分の意見を高めることができた。 ③学習したことを社会生活に生かそうとしていた。
B	上の①～③のうち、2つ できている	上の①～③のうち、2つ できている	上の①～③のうち、2つ できている
C	上の①～③のうち、1つ できている	上の①～③のうち、1つ できている	上の①～③のうち、1つ できている
D	全くできていない。	全くできていない。	全くできていない。

資料2 評価規準であるルーブリック

と「思考力、判断力」には、密接な関係があるとしている⁽¹⁸⁾。この「見方・考え方」の3つの視点をふまえた知識・技能を活用し、「思考力、判断力、表現力」を使った成果物できるよう「逆向き設計」

論から評価規準であるルーブリック(資料2)を作成し、パフォーマンス課題を設定した。ルーブリックについては、知識・技能の「見方・考え方」の3つの視点と「思考・判断・表現」についての観点を導入時に示した。パフォーマンス課題については、みよし市のマスコットキャラクターである「キューちゃん」を登場させ、児童自らがアシスタントとなることで、児童が自分事として捉えられるようにした。アシスタントとして「キューちゃん」と共に米づくりについて調べていき、未来の米づくりを提案するレポートを作成することを目標とするパフォーマンス課題である(資料3)。

本稿では、以下のような単元計画のもと、授業実践を進めていった。

《単元計画》

【パフォーマンス課題】(単元を貫く問い)		
キューちゃんとレポートを作成し、これからの米づくりを提案しよう!		
時	めあてとなる問い(活動)	主な学習活動
1	米づくりがさかんな地域はどこだろう?	資料から日本で米づくりが盛んな地域を見つけ、今後の見通しをもつ。
2	なぜ、その山形県庄内平野は米づくりがさかんなのか?	庄内平野で米づくりがさかんな理由を自然環境から考える。
3	山形県庄内平野の農家は、どのように米づくりをしているのだろうか?	資料や映像を見て、米づくり農家の1年の営みを調べる。
4	山形県庄内平野の農家は、生産性を高めるためにどんな工夫をしてきたのだろうか?	米づくり農家の生産性を高める工夫を調べる。
5	山形県庄内平野の農家の人々を、だれがどのように支えているのだろうか?	農家の人々を支える団体や流通の仕組みを調べる。
6	米づくりをしている農家の人々には、どんな課題があるのだろうか?	農家の抱える課題を資料から読み取り、解決への取り組みを理解する。
7	レポートを作成するために調べよう。	これまでの学習をふまえて、提示された課題に取り組む。
8	グループで発表しよう。	作成したレポートをグループで発表し合い、他者の考えを知る。

みよし市の親善大使(マスコットキャラクター)であるキューちゃん。あなたは、キューちゃんのアシスタントです。キューちゃんは、お米が大好きです。キューちゃんは、みよし市で「よいお米」をつくりたい!と思っています。しかし、ふと『よいお米とはどんなものだろう』と疑問をもちました。そこで、キューちゃんは、「米作りがさかんに行われている地域」を学習して、「よいお米」をつくるには、「どんな米づくりをすればよいのだろうか」ということを調べることにしました。

あなたは、キューちゃんのアシスタントとして、「よいお米」をつくるための「米づくり」について調べ、キューちゃんと一緒に米作りの提案レポートを作成し、市役所などにみよし市のこれからの米づくりについて提案しましょう。

資料3 提示した「パフォーマンス課題」

4 実践の概要

(1) 実践の実際

①米づくりがさかんな地域はどこだろう？

導入として、チラシに掲載されている生鮮食料品を切り取り、日本地図に貼り付けていく活動をした。その活動から、米づくりがさかんな地方は、東北地方や北海道、中部地方(北陸地方)であることが分かり、県別で比べると新潟県が最も多く米を生産しているが、地方ごとで比べてみると東北地方が最も多く、米を生産していることが分かった。その後、地図帳や資料集を参考にして、主要な食物について、どの県が最も多いのか日本地図にまとめるなどの活動をした。そこで、「毎日、君たちが食べている食料品は何だったかな？」と尋ねると、児童は「お米！」と答え、「お米の産地で、何か気がついたことはあるかな？」と尋ねると、児童は「お米は寒い地方で多く作られている気がする」と答えた。そこで、「何か疑問に思ったことは？」と聞くと、「どうして寒い地方で米づくりがさかんなのだろう」と疑問をもった児童がいた(資料4)。そこで、「最も米づくりがさかんな地方である、東北地方の山形県庄内地方について詳しく調べてみよう」ということになった。

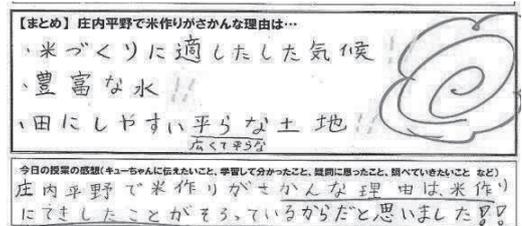
授業の感想など 寒い地方に米が多い理由を知りたいと思った。

資料4 活動から生じた児童の疑問

②なぜ、その山形県庄内平野は米づくりがさかんなのか？

前時までの子供たちの様子から、東北地方で米づくりがさかんな理由を予想するための視点として、「米づくりに必要なものは何だろう？」と尋ねた。すると、「空気」、「水」、「土地」、「日光」、「肥料」など、理科で学習した内容をもとに多くの意見が出た。そこで、教科書で示されている山形県庄内地方の航空写真を見ながら、「では、東北地方で米づくりがさかんな理由を予想してみよう」と問いかけると、「大きな川がある」、「広い土地がある」、「土地が平らだから」、「大きな建物がなく、日光が当たりやすい」などの意見が出た。これらの予想から、児童らは、「なぜ、東北地方で米づくりがさかんなのか」により強く疑問をもった。

そこで児童がもった疑問「東北地方で、なぜ米づくりがさかんなのか」について、「土地や地形」、「気候」の面から調べていった。「土地や地形」の面において、教科書や資料集、地図帳などで調べてい



資料5 米づくりに適した自然条件をまとめ

き、庄内平野では、大きな3つの川(日向川、最上川、赤川)が流れており、豊富な水があること、広くて平らな土地が広がっていることなどの地形の面で米づくりに適していることが分かった。また、気候の面では、夏の気温が高く熱帯性の稲の生育に適した気候であること、あたたかく乾いた季節風が吹くことで、雨に濡れた稲を乾かす役割をもたらす、稲の病気を防いでくれるということも分かった。

そこで、庄内平野で米づくりがさかんな理由は、「米づくりに適した気候」、自「豊富な水」、「田にしやすい平らな土地」という3点をまとめ、自然環境が米づくりに適していることを理解していった。(資料5)

③山形県庄内平野の農家は、どのように米づくりをしているのだろうか？

この時間では、実際にどのように庄内平野の農家たちが、米づくりをしているかを調べ

ていった。米づくりの1年を見ていくことで、農家がどのように努力しながら米を作っているのかを調べていくこととした。この調べ学習によって、米づくりには多くの手間がかかっており、多くの努力をしながら、米づくりがなされていることを理解した。ここでは、「いねかりをするとき、収穫する時期がすぎてしまうと、米がすかさずになっちゃうんだって」とキューちゃんに感情移入して感想を書いている児童の様子が見られた。

④⑤生産性の向上のためにどんな工夫をし、農家をどのように支えているのだろうか？

ここでは、農業が機械化したことで、農作業が大幅に減っていったこと、さらに耕地整理をして、区画をそろえたことにより、大型の機械が導入しやすくなったことで、さらに労働時間が減っていったことなどを理解した。さらに、JA（農協）の人たちが、農家を支えている様子、水田農業試験場で新しい品種を開発している様子などを調べた。みよし市では「大地の風」という品種が多く作られていることを知り、「みよし市では、愛知県で開発された“大地の風”という品種が多く作られているんだって！」とキューちゃんに語りかける感想を書き、感情移入している児童の様子もここでも見られた。

さらに、児童たちは、カントリーエレベーターなどの共用施設の利用、生産された米をどのように流通させ、食卓まで届けられるのかを調べ、農家や農家を支える人たちの努力を理解していった。

⑥米づくりをしている農家の人々には、どんな課題があるのだろうか？

この時間では、米づくり農家のかかえる課題と新しい取り組みについて学習した。米の作りすぎを防ぐ「生産調整」や農業で働く人の減少、そして高齢化について調べた。米を作りすぎてしまうことで、米の価格が下がってしまい、利益が少なくなることを知り、子供たちはとても驚いた様子であった。その対策として、米とは違う作物、例えば大豆や麦などを作ったりして、生産調整をしていることを調べた。また、農家の労働人口が減少していることや農家の高齢化の問題については、農家の労働人口が1500万人（1970年）から5分の1の250万人（2018年）になっていても、米の生産量がそれほど減っていないことに気付き、農家の機械化が進み、生産性が上がっていることを理解した。さらに、米の消費量が減っている問題についても、輸出が近年急増していることから、農家が国内販売だけでなく、外国へ米を販売することで、対策をしていることもわかった。また、農家が共同して生産組合を組織したり、農業法人を設立したりといった新しい取り組みをしていること、機械化技術がさらにスマート農業へ移行しつつあり、農家が大変な農作業をしなくても、すべてAIで自動化される取り組みがなされていることを調べていった。

日本の農業というと、高齢化や農家の人口減少など、少し暗い話題が多くなってしまいが、児童たちは農家の新しい取り組みを調べることで、米づくりの明るい未来を考えるようになっていった。

⑦レポートを作成するために調べよう。

次に、本単元の目標である「キューちゃんとレポートを作成し、これからの米づくりを提案しよう！」のパフォーマンス課題に立ち返り、これまで学習したことを活用して、各個人でレポートを作成した。この時、最初に提示したループリック（評価規準）をもう一度確認し、児童がこれまで学習したことを生かしたレポートが作成できるように支援した。

作成するレポートは、「A. 地形や気候などの自然環境から、これからの米づくりを考え

る」、「B. 今と昔をくらべながら、これからの米づくりを考える」、「C. 米づくりを支える人たちから、これからの米づくりを考える」を意識してできるように、3つの枠を設けた。ほとんどの児童たちが、確実にこの3つの視点をおさえ、レポートを作成することができていた。

⑧それぞれの意見を交流する発表会

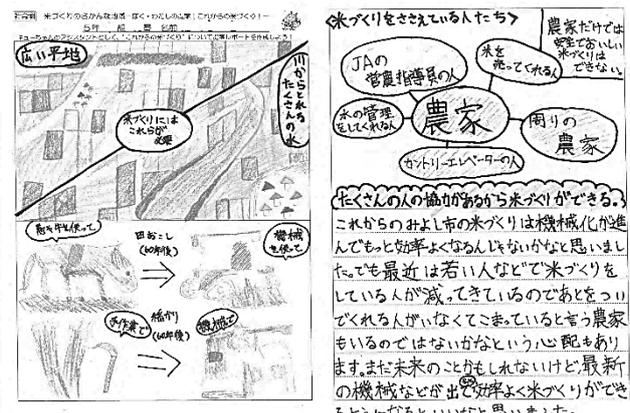
最後に、自分たちが作成したレポートをグループで伝え合う発表会を行った。発表会は、新型コロナウイルス感染症予防の観点から、口頭による発表はせずに、グループ内の各個人のレポートを読み合い、感想を書くということにした。

また、グループで伝え合ったのち、さらに自分の考えを広げられるようにクラス全体のレポートを見る時間をとった。そして、クラス全体のレポートの感想を書く時間を設け、その感想をレポート作成者に伝える活動をした。それぞれが他人の感想を伝えられることで、自分のレポートに対する他者の評価を知り、今後の自分の考えに自信もつことができると考えたからである。

授業後の感想では「みんなの意見を聞いて良かった」、「他の人はこんなことを書いていたんだと思った」、「自分と似た意見の子もいた」、「自分と少し違った意見をもっていた子がいた」など、自分の考えが広がっている様子が見られた。

(2) 実践の検証

この単元を通して、「知識や技能を活用し、自分の考えや意見を表現する課題」としてパフォーマンス評価の手法を導入し、単元を貫くパフォーマンス課題を意識した単元構成とした。児童たちは、常に「キューちゃんレポートを作成し、これからの米づくりを提案しよう!」というパフォーマンス課題を意識して学習に取り組むことができていた。



資料6 分かりやすく丁寧にまとめられたレポート

レポートの作成について、すべての項目を埋めることができなかった子は、一人もいなかった。ルーブリックで示した知識・技能の観点である「A. 地形や気候などの自然環境」、「B. 今と昔の比較」、「C. 米づくりをかかわる人たちの協力」の3つの視点に沿って、「分かりやすく、ていねいに」まとめたレポート(資料6)を作成していた児童も多くいた一方で、「A. 地形や気候などの自然環境」、「B. 今と昔の比較」、「C. 米づくりをかかわる人たちの協力」の3つの視点に沿うことができなかったレポートも30点のレポートのうち4点ほど見受けられた。しかしながら、児童が記述したレポート多くは、3つの視点を意識してレポートが作成されていたことを考慮すると、パフォーマンス評価の導入は、知識・技能を活用し、「思考力、判断力、表現力」を育成する手段としては、有効であったと考えられる。

また、本単元では、「課題に人物を登場させることで、自分事として考えられるようにする。」手立てとして、キューちゃんというキャラクターを登場させた。

単元終了後の振り返りにおいて、「授業を楽しみと思うことができた。」という項目につ

いて、「できた」と答えているのは、30人中29人であった。

また、事後アンケートで「キューちゃんが出てきたことで、考えやすかったですか。」という質問に対しては、「考えやすかった。」と答えた児童が30人中29人であった。その理由として「キューちゃん目線で考えられた。」「普通に勉強するよりも、キャラクターが出てきた方が楽しくできた。」「伝える相手がいるので考えやすかった。」などをあげ、具体的に考えられる人物が登場したことで、学習目的が明確化され、課題への取り組みやすさへつながったと考えられる。

【事前アンケート】(30人)	
社会科が好き	24人(80%)
好きではない	6人(20%)
【事後アンケート】	
社会科が好き	27人(90%)
好きではない	3人(10%)

5 成果と課題

(1) 成果

本実践では、事前と事後のアンケートを行った。事前アンケートで社会科が「好き」か「好きではない」のどちらか尋ねたところ、好きではないと答えた児童は、30人中6人であった。またその理由を尋ねると、6人中4人が「まとめるのが苦手」と答えている。事前アンケートの中で社会科が嫌いな子の理由で、この「まとめるのが苦手」という項目がいちばん多かったのだが、事後アンケートで、社会のまとめで「いつもより、よくかけましたか」と尋ねたところ、30人中、21人が「かけた」、7人が「ややかけた」、2人が「ややかけなかった」であり、「かけなかった」と答えた児童は、0人であった。また事後アンケートで「今回のまとめは目標を達成することができましたか」という問いに対して、「達成できた」が19人、「ややできた」が10人、「できなかった」が1人と、児童も授業内容に満足していた様子がうかがえた。さらに、「学習する前よりも、お米について理解が深まりましたか」と尋ねたところ、「深まった」と答えたのが21人、「やや深まった」8人、「やや深まらなかった」1人、「深まらなかった」0人となり、米に対する理解も深まったと言える。よって、アンケート結果からも本実践が有効であったと考えられる。

<授業後アンケート> (30人)

社会のまとめについて	いつもよりかけた 21人(70%)	ややかけた 7人(23%)	ややかけなかった 2人(7%)	かけなかった 0人(0%)
目標を達成できたか	達成できた 19人(64%)	ややできた 10人(33%)	ややできなかった 0人(0%)	できなかった 1人(3%)
理解が深まったか	深まった 21人(70%)	やや深まった 8人(33%)	やや深まらなかった 1人(0%)	深まらなかった 0人(0%)

(2) 今後の課題

本稿では、「もっと知りたい」、「課題を解決したい」といった『内的動機づけ』がなされるような問題解決学習的な単元構想として、パフォーマンス評価の手法を導入した。そのパフォーマンス評価において、児童の意欲を掻き立てる上で、重要となるのがパフォーマンス課題である。このパフォーマンス課題は、単元全体を通して解決されるべき課題であり、児童全員が共通してもつ課題である。本実践において、児童たちが「調べたい」、「知りたい」と思うような仕掛けとして、「キューちゃんとレポートを作成し、これからの米づくりを提案しよう」というパフォーマンス課題を設定した。これまで述べてきたように、

「内的動機づけ」として、一定の効果はあったと思われる。しかしながら、「キューちゃん」は架空の人物である。その架空の人物を登場させたことで、児童たちの興味・関心を引き付けることはできたが、それが児童たちの切実感のある学習課題となったかは、検証が必要である。今後の課題としたい。

また、西岡によると、パフォーマンス評価におけるフィードバックや検討会の有効性、ポートフォリオ評価法との併用について述べられている⁽¹⁹⁾。本実践では、パフォーマンス評価の実践についてのみとなった。これらについても今後の課題としたい。

<引用，注釈>

- (1) 吉田英文「パフォーマンス評価による教科学習観の変化ー「覚える」社会科観から「説明する」社会科観へー」東京学芸大学教職大学院年報，2012年2月，55項
- (2) 北俊夫『社会科授業サポート BOOKS あなたの社会科授業はまちがっていませんか』明治図書，2020年2月，25項
- (3) 松下佳代編著『<新しい能力>は教育を変えるか 学力・リテラシー・コンピテンシー』ミネルヴァ書房，2010年9月，183項・203項
- (4)，(5) 西岡加名恵『教科と総合学習のカリキュラム設計ーパフォーマンス評価をどう活かすか』図書文化社，2016年4月，
- (6) 国立教育政策研究所「社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則（教育課程編成に関する基礎的研究 報告書5）」2013年，26項
- (7) 澤井陽介「提言「社会科」学習指導要領改訂の方向性」『平成29年版 学習指導要領改訂のポイント 小学校・中学校 社会』明治図書，2017年4月，5項
- (8) 鋒山，赤沢『授業と評価をデザインする社会』日本標準，2010年6月，146項
- (9) 西山加名恵ほか『新しい教育評価入門ー人を育てる評価のために』有斐閣，2015年4月，9項
- (10) 前掲書(8)，146項
- (11) 中央教育審議会答申「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（中教審第197号），平成28年12月21日
- (12) インターネット論文検索サイト「CiNii」における「パフォーマンス評価」，「社会科」の検索結果は66件あったが，その多くは中学校や高校の実践であり，小学校の実践は8件ほどであった。そのうちの1つは拙稿（森田『社会科教育 58巻12号（2021年12月号）』明治図書，2021年12月）である。
- (13) これについても，インターネット論文検索サイト「CiNii」において，「米づくりのさかんな地域」の検索結果は6件であった。そのうち，パフォーマンス評価にかかわる論文は，0件であった。また，愛知県総合教育センターでの研究論文検索でも，「米づくり」キーワード検索で，小学校社会科の実践は，10件であり，そのうちパフォーマンス評価の実践はなかった。
- (14) 外山美樹「小中学生の学びに関する調査報告書」（ベネッセ教育総合研究所，2015年）
- (15) 前掲書(9)，45項
- (16) 西岡加名恵，石井英真『教科の「深い学び」を実現するパフォーマンス評価 「見方・考え方」をどう育てるか』日本標準，2019年3月，16項
- (17)，(18) 澤井陽介，加藤寿朗『見方・考え方 [社会科編]』2017年10月，15-17項
- (19) 前掲書(9) 158-165項